

顧炎武の詩における孤高の形象

藤 井 良 雄

一

顧炎武は明清鼎革という苛烈なる過渡期に生涯を送った文人であり、明の遺民として不屈の人生を貫いた節操高き士大夫であった。清朝の康熙二十一年（一六八二）の初め、顧炎武は遺民としての一生を閉じた。明朝滅亡後、實に三十八年間も苦節の歲月を送ったわけである。それは、かつて乙酉の變（一六四五）の時、敢然と食を絶つて祖國に殉じた養母王氏の「汝、異國の臣子と爲る無かれ」という遺言に答えたものであろうか。顧炎武は、その晩年に當たる一六八〇年、妻王氏の訃を聞いて、「悼亡」五首という亡妻を追悼する詩を連作した。その第四首。

貞姑馬鬣在江村

貞姑の馬鬣は江村に在り

送汝黃泉六歲孫

汝を黃泉に送る六歳の孫

地下相煩告公姥

地下に相煩はす公姥に告ぐることを

遺民猶有一人存

遺民 猶ほ一人の存する有りと

この詩中で「妻よ、おまえが地下の黃泉に着いたら、ご厄介だが舅姑に告げておくれ。私という遺民が今でも一人は生き残っていると。」と語る顧炎武は、養母王氏の遺言に回答するかのごとく、今まで一途

に遺民として生き抜いて來た誇り高きみずからの心情を吐露している。

清朝支配が年年浸透していく中で、その封建體制に抵抗し續けることは、「活き埋め」に等しい生涯とならざるを得ない。しかしながら、節操の士にとって貳臣の烙印を押されることは、例えば逼られて出仕した吳偉業（一六〇九—七一）が、清朝への僅か二年間の仕宦を生涯の過誤として、後悔し憂悶の中に逝ったことによっても推察できるように、この上なく耐え難いことであるに相違ない。明代に生を享けた有節の士大夫にとって遺民の生涯を遂げることは、中國文人の幼年時代より培われた名教意識の上からも、本望のはずであった。吳偉業のみならず、顧炎武や歸莊（一六一三—七三）のように若年にして復社に入り、學業だけを目的としたのではなく、經世致用の學に切磋琢磨した結社の文人たちの「遺民意識」は強烈であった。ちなみに、「歸奇顧怪」と目され顧炎武と名を齊しくした歸莊は、「歷代遺民錄序」に於いて、いわゆる遺民を定義して次のごとく述べる。

孔子逸民を表して、伯夷・叔齊を首とす。遺民錄も亦た兩人より始むれども、其の意を用ふるは則ち異なる。凡そ道を懷ひ徳を抱きて世に用ゐられざる者、皆之を逸民と謂ふ。而れども遺民は則

ち惟だ廢興の際に在りて、以て此の前朝の遺す所と爲すのみ。：遺民の類に三有り。如^たへば漢朝に生れ、新莽の亂に遭ひて、遂に終身仕へざる、逢萌・向長の若き者は、遺民なり。漢朝に仕へて、身を居攝の後に潔くする、梅福・郭欽・蔣詡の若きは、遺臣なり。而して既に復た仕へざれば、則ち亦た遺民なり。孔奮・鄧曄・郭憲・桓榮の諸人、皆東京に顯はるるも、亦た之を録せしは、其の莽朝に仕へざるを以てなり。さすれば則ち亦た漢の遺民なり。徐穉・姜肱の倫、高士の最も著れたる者なれども、廢興の際に在らざるを以ての故に皆録さず。魏晉以下、此れを以て類推せよ。故に遺民の稱、其の一時の去就を視て、終身の顯晦に繫はらず。孔子の逸民を表し、皇甫謐の高士を傳ふると、微かに同じからざる者有る所以なり。

これによれば、遺民とは、「廢興の際」に當たり敢えて新王朝に仕官しないものを謂う。王朝の祿を食むことが、中國の文人の傳統的生計手段であるかぎり、士大夫が一生仕宦せず生計を立てることは決して容易でなかつたと考えられる。まして、明清鼎革に際し、父祖傳來の土地や資産を失つた文人が、遺民としての生涯を送ることは至難に屬し、歸莊や張岱（一五九七—一六八九）のごとく江南屈指の名門と呼ばれた人人でさえも、貧窮の生活を餘儀なくされていたのであつた。

錢穆氏は、明末遺民の生活の仕方について、「一爲出家、二爲行醫、三爲務農、四爲處館、五爲苦隱、六爲游幕、而將炎武列爲第七項——經濟⁽²⁾」のごとく七種類を列擧する。ここで指摘されるように、顧炎武の友人でも、歸莊は普明頭陀と稱して僧装となり、傅山（一六〇七—一九〇）は朱衣道人また石道人と自稱して醫務を業とした。そして、

顧炎武の詩における孤高の形象

當の顧炎武は蔣山庸と變名して商人となつた。ただ彼には、先祖傳來の土地が少なからずあつたやうで、それが同郷崑山の降清派、葉氏との土地領有權争いを招き、ひいては陸恩殺害事件を惹起して、終には離郷、北游の旅に上る結果となるのである。ところで、顧炎武が貨殖に長じていたことは、先學のすでに指摘するところであり、崑山の土地からの歳入のみならず、北游以後、山東省章邱縣に田地を購入し、⁽³⁾ 自分も開墾に汗を流したこと、「力を食らば終に節を全うし、人に依れば尚ほ顔を厚うす」（刈禾長白山下）の詩句から推測できる。さらに、顧炎武は晩年山西省に定住するようになるが、章炳麟によれば、⁽⁴⁾ 山西人の談話として、顧炎武が李自成の隠し金を手に入れ、それを元手に票號（金融機關）を改制して開業し、傅山と共同してこれを經營したと言われる。後に山西票莊の名で世に廣まるものである。以上の諸點より推せば、顧炎武は、ただに經世致用を志す學者であつたのみならず、財利に長じた人物でもあつたことが判明する。かような才能の持主であつたからこそ、後半生ほとんど放浪の旅に在りながら、しかも不在地主として家計の自立を全うすることが可能であつたのであり、またそれ故に、清朝の壓迫を受けつつも決してその祿を食まない遺民の生涯を遂げることができたと考えられる。

かかる經濟的な基盤の上に、顧炎武は抗清運動の同志を募る秘密結社の活動を行うことができたと推察されるが、この明清鼎革期に、積極的な反清遺民として生存し續けた顧炎武にとって、その生涯を支えたものは、正に孤高の意識であつた。この孤高の意識に關していえば、顧炎武はその晩年の詩作の中で初めて「孤高」の語を使用している。それは一六七八年、顧炎武が人生を省みるやうな氣持で作つた五連作「關中雜詩」の最後の詩に於いてである。

緬憶梁鴻隱 緬かに憶ふ梁鴻の隱
孤高。閑歲華 孤高にして歲華を閑するを

門西吳會郭 門西 吳會の郭

橋下伯通家 橋下 伯通の家

異地情相似 異地 情は相似て

前期道每餘 前期 道毎に餘かなり

請從關尹住 請ふ關尹に従ひて住み

不必向流沙 必ずしも流沙に向はざれ

原注：無異新構小齋、將延予住。

この詩の前半四句は『後漢書』逸民傳中の梁鴻の傳記を踏まえる。

梁鴻はまさしく孤高の人物であった。彼は、初め陝西に居住していたが、後に洛陽を過つたとき、人民の勞苦を詠じて「五噫之歌」を作つたところ、時の皇帝肅宗がそれを聞き咎め、彼を罪せんとして探し回つたが遂に見つけ出すことができなかった。その後、梁鴻は吳會の地にやつて來て、臯伯通の家の廡の下で米搗きをして暮らしていたところ、主人の臯伯通は梁鴻が優れた人物であることを見抜き、わが家に住まわせて、梁鴻が著述に専念できるようにさせたという。顧炎武がこの詩に自注を加えて、「無異新たに小齋を構へ、將に予を延きて住まはしめんとす。」といっていることから推察すれば、梁鴻に顧炎武自身を、臯伯通に王弘撰を象徴させていることが明らかである。この詩のごとく、顧炎武の詩には、詩中に何らかの形で自己を登場させ、その折折の自我の形象を表出するものが多々見られる。この詩では、「梁鴻」を通じて、顧炎武自身の孤高を形象化していると言える。この詩が作られた一六七八年は、あたかも清朝が博學鴻儒科實施の詔を渙發した年であり、顧炎武は死を賭してその推薦を拒絶した。そし

て一方、彼の知友の多くはそれを免れることができず、貳臣の屈辱を味わざるを得なくなつたのである。

本稿は、私の舊稿「顧炎武の詩における自己表出と自我の形象化」で論述したごとく、顧炎武が文學表現における獨創性を自覺し、「みづから己の意を出だす」ことにとめた詩作の特質をふまえながら、天下國家のために放浪しつづけた彼が、その自我を詩中に形象化する過程で、いかに、魏晉の詩に特徴的に見られる「飛翔」の表現を受容しているかを、顧炎武の詩作に即して檢證し、さらには、顧炎武が自己の生涯を綜括する意味で「孤高」の語を詩中に表出するに至るまでを、彼の生きた現實の情況に照らして可能なかぎり追跡し、顧炎武の詩における孤高の形象について、その必然的な意義を明らかにしようとするものである。

二

顧炎武の『亭林詩集』五卷、四百二十六首中、その開卷第一の詩が「大行皇帝哀詩」である。この詩の題下に「已下闕逢涓灘」と自注してあるごとく、顧亭林詩集は編年によって排列され、年年の最初の詩の題下に『爾雅』釋天に見える「歲陽歲陰の名」によって、概ね当該干支を記す。それ故、この詩は甲申の年の作であると知ることができ、顧炎武三十二歳のこの五言排律詩の最終聯には、

小臣王室淚 小臣 王室に涙し

無路哭橋陵 橋陵を哭するに路なし

と歌う。自己を「小臣」として詩中に登場させると、そこに自注として、庾信「哀江南賦序」の「袁安之每念王室、自然流涕。」を引くことから推察して、顧炎武の明臣としての強烈な自意識が感ぜられよ

う。また、彼が故意に自作にも稀な五言排律の詩をみずからの詩集の冒頭に据ゑたことは、明朝への嚴肅なる哀悼の表明であり、明朝の士大夫としての公的な世界への宣言の詩でもあった。

刊本に無かったが原鈔本によつて傳わる同年作の七絶「千官」にいう。

武帝求仙一上天 武帝仙を求めて一たび天に上り

茂陵遺事只虛傳 茂陵の遺事只だ虚しく傳ふるのみ

千官白服皆臣子 千官の白服は皆臣子なるも

孰似蘇生北海邊 孰か似ん 蘇生北海の邊にあるに

この詩において、顧炎武は自己を「蘇生」すなわち蘇武に比して、「白い喪服を着た多くの官僚は、たしかにみな臣下であるには相違ないが、果して、匈奴に使用して抑留されてもなお武帝への忠節を變えなかつた蘇武ほどのものがあるだろうか。」と歌う。因みに言へば、顧炎武は『孤中隨筆』の中で、次のごとく述べて、節操の士を發掘している。

世は但だ蘇武、節を匈奴に持するを知るのみにして、同じく還る者に又馬宏有るを知らず。使を奉じて拘せられて屈せざる者三人。蘇武・于什門・洪皓なり。武は匈奴に在ること十九年、什門は燕に在ること二十四年、皓は金に在ること亦た二十年に幾し。

これによれば、顧炎武は蘇武と同じような忠節の士がまだ他に存在したことを知りつつも、自己を形象化するものとして、特に「蘇生」を取り上げたのである。明の崇禎帝がみずから社稷に殉じたにも拘らず、群臣の従う者甚だ少なく、ただ喪に服しているだけの下臣が多い現實に對して、顧炎武は強い憤りを發し、自分は決してそのような臣下ではなく、「持節」の士の一人だと表明している。

顧炎武の詩における孤高の形象

一六四四年五月、北京を占領した清軍は、陝西に逃亡した李自成を追うとともに、南方に擁立された明の諸王を討伐するために江南へ進軍を開始した。この時期、『揚州十日記』・『嘉定屠城紀略』等の文獻が示すごとく、江南地方の人人は、とりわけ手ひどく戦亂の災禍を受けた。當時、漢民族の反清闘争は熾烈を極め、江蘇・浙江一帯の抵抗が最も激烈であつて、清軍が揚州を攻略した時、史可法の部下は盡く戦死するほどであつた。乙酉の變、一六四五年十五日、南京が陥落してのち、顧炎武は蘇州に従軍する。六月、故郷に歸り崑山の人人が起した武装闘争に歸莊ら盟友たちと共に参加する。この地方の人民は、辮髮の強制、清の官吏や兵士の掠奪暴行に反抗して、頑強な反清愛國の戦いに立ち上るが、結局は殘酷で血腥い彈壓を加えられる。次に掲げる「秋山」と題する五言古詩は、當時の江陰・嘉定・崑山三縣の人民の壯烈な戦闘を描いたものである。顧炎武は實際の戦闘に加わらなかつたとする先學もあるが、論者はその説に否定的である。次のような生々しい詩は、顧炎武が命懸けで現實の抗清闘争に参加してこそ初めて再現が可能なものだと思われるからである。「秋山」之一。

秋山復秋山 秋山復た秋山

秋雨連山殷 秋雨山に連なりて殷なり

昨日戰江口 昨日江口に戦ひ

今日戰山邊 今日山邊に戦ふ

已聞右甄潰 已に聞く右甄の潰えたるを

復見左拒殘 復た見る左拒の殘れたるを

旌旗埋地中 旌旗地中に埋め

梯衝舞城端 梯衝城端に舞ふ

一朝長平敗 一朝にして長平の敗のごとく

一九九

語編年表

A 群	B 群	C 群	D 群	E 群
游子 行人 襁褓客 行人 憔悴客 客113-118 羈人 久客 愁人	小臣 小臣 臣子 臣子39-49 臣子 臣子 臣子 遺臣	鴻雁 精衛 蛟龍 秋雁 宿草	丈夫 丈夫 丈夫 丈夫	蘇生 替侍中 鄒郢人 臧洪 祖生 侯羸 子源 張伯松 延陵 漸離 願生 馬伏波 楊朱 邴原 子源 司隸 龐公 伯玉 祖生 /賈臣 荊鄉
客 客 壯遂人 客 游子 客子 行人 客 久客 客 客子 游子 久客 客 垂老客	遺民 窮儒 臣子203 臣子211 遺恨 遺老 布衣 遺民 遺臣	濕雁 潛蛟 窮魚 孽鳥 秋雁 一雁 宿鳥 精衛 蒼龍 一雁 一雁 越鳥 一雁 孤雁 黃雀 獨雁 雁飛 饑鳥 宿鳥 翡翠 鸞鳳	秋柳 轉蓬 流萍 老樹 仁人 志士 老桂 卉木 江海人 轉蓬 蓬飄 長愁人 老樹 孤燈 牡丹	鄭康成 季次 子高 偉節 鄭公 兩襲四皓 徐庶
行人 游子 客 旅叟	遺臣 遺民	獨雁 寒雞 黃鶴 鴻冥 黃鶴 翔鳥 浮雲	老柏 幽花 藁砧	梁鴻 園綺 申屠 禽子夏 桓生 龐公 樂洋

自稱形象詩

顧炎武の詩における孤高の形象

自稱形象詩語		顧炎武 年 齡	簡 略 參 考 年 表	詩 番 號	
1644年	順 治 元	32歲	明朝滅亡。	1~ 10	
5			乙酉の變。	11~ 24	
6			唐王滅亡。	25~ 34	
7			吳勝兆の反亂發覺。	35~ 52	
8				53~ 67	
9				68~ 76	
1650				77~ 83	
1			40		84~ 89
2					90~ 96
3					97~110
4		111~122			
5	陸恩殺害入獄。	123~131			
6	釋放	132~148			
7	十八 康 熙 元	45歲	江蘇—山東	149~158	
8			山東—河北	160~184	
9			河北—山東—江蘇—山東	185~202	
1660			山東—河北—山東—江蘇	203~210	
1			江蘇—浙江—江蘇—山東	211~216	
2			山東—河北—山西	217~226	
3			山西—陝西—山西	227~251	
4			山西—河北—河南—山東	252~259	
5			山東	260	
6			山東—河北—山西—河北—山東	261~271	
7			山東—江蘇—山東—河北—山東	272~276	
8			山東—河北—山東	277~285	
9			山東—河北—山東—河北—山東—河北—山東—河北	286~293	
1670			山東—河北—山西	294~299	
1	山西	300~307			
2	60	山西—河北—山東—河北—山東—河南—山西	308~313		
3		山西—山東—河北—山東—河北	314~322		
4		河北—山西—山東	323~335		
5		山東—河南—山西	336~342		
6		山西—山東—河北—山東—河北	343~352		
7		河北—山東—河北—山西—陝西—山西	353~368		
8		康熙十七		明史の編纂開始。博學鴻儒科の詔。	369~380
9	華陰の王弘撰の家に移る。			381~400	
1680	陝西—山西			401~418	
1		山西—陝西—山西	419~422		
2	康熙二一	70歲	山西。正月卒。		

伏尸偏岡巒 伏尸岡巒に偏し

胡裝三百舸 胡裝せる三百舸

舸舸好紅顏 舸舸に好紅顏あり

吳口擁囊馳 吳口に囊馳を擁し

鳴笳入燕關 笳を鳴らして燕關より入る

昔時鄆郢人 昔時鄆郢の人

猶在城南間 猶ほ城南の間に在り

この詩は、顧炎武を含めて清軍に抵抗する人人の奮戦ぶりと、その抵抗も虚しく陥落した城市の悲惨な情況を描いている。しかも、最終に自注を付して「戰國策（齊策六）に、雍門司馬、齊王に謂ひて曰く、鄆郢の大夫、秦の爲にするを欲せずして城南の下に在る者、百を以て數ふ。」と示し、顧炎武は自己を「鄆郢人」に擬えて、「昔、楚國の滅亡後、楚の舊都の鄆と郢との城南には、秦朝に降るを肯んじない人人が潛んでいたごとく、そんな人が今もなお城南に潛在することを忘れないでほしい。」と、彼自身の強い抗清の決意を込めている。乙酉の年四月末（舊曆）の揚州落城以後、五月には南京、七月には崑山・常熟、八月には江陰と、次次に江南各地の城市が陥落していった。顧炎武や歸莊らの文人も抗清闘争に参加するが、すでに漢奸となつた明軍を加えて強大化した清軍の前には、その抵抗も無力であつた。かくて顧炎武は虐殺や掠奪に遭遇したが、辛うじて一命を保つこととはできた。しかし、崑山落城のとき、顧炎武の生母何氏は清兵に右腕を切り落され、四弟の顧纘・五弟の顧繩も殺され、さらに纘の妻朱氏は自殺を計つたが生命だけはとりとめた。やがて常熟も陥落し、その報を聞いた顧炎武の養母王氏は、前述のごとく絶食して遺言を残し、祖國に殉じたのである。

殉難の機を免れ、生き残つた顧炎武のなすべきことは、この養母王氏の遺言を遵守して生き、出來得るならば自分の「經世致用」の學問を後世に傳えるべく抗清の意志を貫くことであつた。この時、養母王氏の遺骸はいまだ顧炎武の許にある。しかし、これを埋葬するにも、清兵横行の中では、そのすべもない。一六四五年九月以來、養母の遺骸と行を共にしていた詩人は、「防墓の處を求めんと欲するも、戈甲江濤に滿つ」（表哀詩）と歌っているごとく、戦火の中、埋葬の地を捜しあぐねていたが、やっと同年十二月十九日、假葬だけをすませることができた。その折の五古「十二月十九日奉先妣遺葬」は、以下のごとく歌っている。

婁縣百里内 婁縣 百里の内

胡兵過如織 胡兵過ぐるごとく織るが如し

土人每夜行 土人 毎夜行き

多深月初照 多深くして月初めて照し

扶柩已南來 柩を扶けて已に南に來たり

幸至先人域 幸いに先人の域に至れり

合葬亦其時 合葬も亦た其の時なるも

倉卒未可得 倉卒として未だ得べからず

停車就道右 車を停めて道右に就き

丘也聞日食 丘や 日食を聞く

魂魄依祖考 魂魄は祖考に依り

卽此幽宮側 此の幽宮の側に即く

三年卜天道 三年 天道を卜し

墓檟茂以直 墓檟 茂りて以て直し

胆勉臣子心 胆勉す 臣子の心

有懷亦焉極 懷ふ有りて亦た焉ぞ極まらん

悲風下高原 悲風 高原より下り

父老爲哀側 父老 爲に哀側す

其旁可萬家 其の旁 萬家ばかり

此意無人識 此の意 人の識る無し

この詩第十五句の「臣子心」とは、言うまでもなく、顧炎武の心であり、これは先に引いた王氏の遺言「汝、異國の臣子と爲る無かれ。」を意識したものである。故に、「眼勉臣子心」とは、明朝の臣下として報國の至誠に燃えることである。この詩のごとく、「臣子」として明確に彼自身を表出させる詩作が顧炎武には多いのである。

本章中、以上に引用した詩は、編年體になる『亭林詩集』の初年と次年の作、すなわち顧炎武三十二、三歳の作品である。ところで、以上の諸例から判明するように、顧炎武の詩には、簡明直截なる自己表出が一貫して存在する。今それをより具體的に示すために、「自稱形象詩語編年表」を掲げる。

前掲の一覽表(二〇〇・二〇一頁参照)は、年毎の詩作に番號を付し、詩の中に自己を表白している詩語を抜き出したもので、いずれも顧炎武の自我の形象であると考えられる。この一覽表から判明する事實でとくに注目される點は、一六五七年、顧炎武が四十五歳のとき、江南から脱出して北行する所謂「北游」より以前とそれ以後では、その自己表出の色合いがかなり相違することである。すなわち、表に示すB群を見ると、江南放浪中かつて用いた「小臣」「臣子」という自稱的表現は、北游以後になるとほとんど使用されなくなってくる。時代から眼を離すことなく直視し續け、時代の流れに鋭敏であった顧炎武は、清朝の支配體制が不動のものとなる情況の中で、すでに小臣・臣子と

いう自己表現が詩語としてなじまないことを感じたのであろう。一六六一年の「元日」詩(刊本には無し。原鈔本に據る)に、

天王未還京 天王未だ京に還らず

流離況臣子。 流離 況んや臣子をや

と歌うのを最後として、以後臣子という自己表象は現われない。そして、この表から察知されるように北游以後になると、それらに替わる詩語として「遺民」「遺臣」「遺恨」「遺老」という一類の自稱語が頻繁に登場するのである。

三

一六四五年、乙酉の變によつて、明朝側では、南京に擁立されていた福王朱由松は殺害されるが、同年唐王朱聿鍵が福州に即位し、魯王朱以海が紹興で監國の位につき、翌四十六年には瞿式耜らが桂王朱由榔を廣西省肇慶に擁立する。しかし、この年、唐王は滅ぼされ、魯王も舟山列島に逃走し、ついで四十七年には、松江提督吳勝兆の抗清起義計劃が發覺し、これに通謀していた幾社の盟主陳子龍(一六〇七—四七)と崑山の顧威正らは追迹される破目に陥つて、最後に陳子龍は顧威正の息子顧天達の所で捕縛され、護送の船中から投身自殺をした。そして顧天達・天達兄弟も、陳子龍を匿った罪状で處刑された。一方、彼ら兄弟の父で、顧炎武と「同盟の契りを結」ぶ顧威正も逃亡中に逮捕され、南京に送られて處刑された。

かくて身に危険が迫つた顧炎武は身を晦ますが、彼ら盟友の非業の死に對し、格調の高い哭詩をささげる。「哭顧推官」「哭陳太僕子龍」の兩篇がそれであつて、いずれも顧炎武の詩集中、質量ともに他篇を壓倒する五言古詩の雄篇である。今ここに、兩篇に見られる注目すべ

き表現を列擧する。

驚弦鳥不飛 弦に驚きて鳥は飛ばず
因網魚難逝 網に困しんで魚は逝き難し

(哭顧推官)

有翼不高飛 翼有れども高く飛ばざれば
終爲罽羅得 終に罽羅の得るところと爲る

(哭陳太僕子龍)

これらの聯には、鳥とその飛翔を阻害する網羅が設定されている。顧威正と陳子龍の死は、この網羅にかかった鳥の運命に象徴されている。さらに、後年(一六六八)「黃培詩獄」事件で顧炎武自身が連坐入獄した折のことを歌った詩をみてみよう。「赴東六首」之六。

天門誅蕩蕩 天門 誅として蕩蕩
日月相經過 日月 相經過す

下閔黃雀微 下 黃雀の微なるを閔み
一旦決網羅 一旦 網羅を決す

平生所識人 平生識る所の人
勞苦云無他 苦を勞ひて云ふ他無きかと

騎虎不知危 虎に騎りて危きを知らず
聞之元彥和 之を元彥和に聞く

尙念田晝言 尙ほ念ふ 田晝の言
此舉豈足多 此の舉 豈に多とするに足らんや

永言矢一心 永く言れ一心を矢ひ
不變同山河 不變ざること山河に同じ

この詩の第二聯を見るならば、網羅にかかった黄雀に、顧炎武自身の姿を象徴させていることがわかる。この表現は、徐嘉の『顧亭林先

生詩箋注』に指摘するごとく、曹植の樂府「野田黃雀行」の「劍を抜いて羅網を捨ひ、飛び飛ぶを得たり」を出典としたものである。因みに言えば、鳥の飛翔とそれを阻害する網羅の詩的形象については、すでに林田愼之助氏の論稿「嵇康の飛翔詩篇」に、司馬氏に誅殺された何晏の「擬古」詩や阮籍の「詠懷」詩中の「網羅」を引用しつつ、「これからみても、捕網に關する詩語は、獨り嵇康の飛翔詩篇のみならず、魏末晉初の詩人が共有した危機意識の象徴的な表現であったと考えられる。」という指摘がある。さらに、鳥の飛翔に關する詩的映像について、入矢義高氏は『明代詩文』のなかで、「あの阮籍の詠懷詩にも、しきりに飛鳥が詠みこまれていた。それは自己の解放を願つての、または自己そのものからの脱出を托してのものであったし、また、その叶わぬことを知るおのれを慰めるものでもあった。いづれにしても、地上からの脱却と天上への飛翔をいざなうものとして思い描かれた切實なイメージであった。」と論じている。そして、このような鳥の飛翔を詠う詩的形象は、ただに魏晉交替期の嵇康や阮籍、元明交替期の詩人たちに用いられただけでなく、明末清初においても明らかにこれを確認することができる。顧炎武とならび、遺民として典型的な一生を送った王夫之(一六一九—九二)にも、「擬阮步兵詠懷」という作品群二十四篇が存在し、彼のそれらの詩中には、やはり頻りに飛鳥が詠われる。例えば、その第一首に次のごとくいう。

出門何所適 門を出でて何れに適く所ぞ

極目延雲容 極目 雲容延ぶ

白月照廣川 白月は廣川に照り

綠隴生清風 綠隴に清風生ず

飛鳥去天末 飛鳥 天末に去り

蕭條無餘蹤 蕭條として餘蹤なし

置意良獨難 意を置くは良に獨り難く

歸來扣哀桐 歸り來りて哀しき桐を扣つ

かかる阮籍「詠懷八十二首」への傾倒は、當時、顧炎武にあっても濃厚に認められ、しかも彼の詩作においては重要な表現手法であったと言えるであろう。そして、さらに重要なことは、この飛鳥に關する表現が、前述の場合と同様、北游以前とそれ以後とで微妙に變化するのである。北游以前、江南地方を放浪する顧炎武は、「墓後結廬三楹作」七言古詩の後半部分において、

至今東平冢上木 今に至るまで東平冢上の木

枝枝西靡朝皇都 枝枝西に靡き皇都に朝す

爾來天地春意絶 爾來天地には春意絶え

不見君父重嗚呼 君父に見えずして嗚呼を重ぬ

一身去國無所泊 一身國を去りて泊る所無く

類此鴻雁三秋徂 此の鴻雁に類して三秋徂けり

陰風怒號白日孤 陰風怒號し 白日孤なり

吁嗟此室千年俱 吁嗟 此の室 千年を俱にせん

と詠い、『詩經』小雅以來、流浪する民を暗示する詩語として用いられる「鴻雁」に、我が身を喩えている。かかる比喩的表現は、同時に作られた「精衛」と題する詩にも確認できる。

萬事有不平 萬事 平らかならざる有り

爾何空自苦 爾 何ぞ空しく自から苦しむや

長將一寸身 長しく一寸の身を將つて

銜木到終古 木を銜みて終古に到らん

我願平東海 我は願ふ 東海を平らかにせんことを

顧炎武の詩における孤高の形象

身沈心不改 身は沈むとも心改めざらん

大海無平期 大海 平らかなる期無く

我心無絶時 我が心 絶ゆる時無し

嗚呼 君不見 嗚呼 君見ずや

西山銜木衆鳥多 西山に木を銜むる衆鳥多く

鵲來燕去自成窠 鵲來り燕去りて自から窠を成す

この詩では、顧炎武は「精衛」の鳥に託して、自分の満清に對する怨念と反抗の精神を直截に述べている。

ところが、北游以後の詩篇をみると、かつて自分の反抗精神を執念深く詠ったあの「精衛」は聲をひそめて、「仁人志士久しく鬱邑し、精衛空しく西山の土を費す」(書女媧廟)と歌われ、そのイメージにただならぬ變容が認められる。

明朝滅亡後十五年、すでに顧炎武が北游中であつた一六五九年には、桂王朱由榔が吳三桂に追われてビルマに逃れたが、一方では鄭成功・張煌言等が反攻して、江蘇の鎮江とその對岸の瓜州で勝利を収め、南京攻略を開始した(六月)。しかし、それも失敗に歸し、鄭成功等は、七月末には厦門、さらにその後臺灣に退却する。この年、顧炎武は北方から揚州まで南下した。彼のこの舉は、そうした明の遺民の反攻に呼應して、みずからその争鬪に参加する目的であつたと言われるが、しかし、その雄志も結局は鄭成功軍の敗退によつて挫折する。この秋に作られた五言古詩「秋雨」を掲げて、その「精衛」のイメージについて検討を加える。

生無一錐土 生くるに一錐の土無きも

常有四海心 常に四海の心有り

流轉三數年 流轉 三數年

不得歸園林 園林に歸るを得ず
 蹠地每塗淖 地を蹠めば毎に塗淖
 關天久噎陰 天を關へば久しく噎陰す
 尙冀異州賢 尙ほ異州の賢を冀ひ

原注：後漢書梁鴻傳「冀異州兮尙賢。」

山川恣搜尋 山川 恣に搜尋す

秋雨合淮泗 秋雨淮泗を合し

一望無高深 一望するも高深無し

眼中隔泰山 眼中 泰山を隔つ

斧柯未能任 斧柯未だ任ふる能はず

車沒斷崖底 車は斷崖の底に沒し

路轉崇岡岑 路は崇岡の岑に轉ず

客子何所之 客子何れに之く所ぞ

停驂且長吟 驂を停めて且く長吟す

夸父念西渴 夸父には西渴を念ひ

精衛憐東沈 精衛には東沈を憐む

何以解吾懷 何を以て吾が懷ひを解かん

嗣宗有遺音 嗣宗には遺音あり

この詩においても「精衛」が詠われているが、そのイメージは、かつて北游以前に、清朝に對する怨念を無限に持續する意志として象徴化されていたものとは、明らかに相違している。ここでは、「精衛」が「夸父」との對句構成の中でとらえられている。『山海經』によれば、「夸父」は太陽と競走して西へ向って走り續けたあげく、咽が渴き黄河の水を飲み干したがまだ足らず、ついに渴死したという。因みに陶淵明の「讀山海經十三首」も「夸父」と「精衛」を取り上げてい

るが、その詩では、夸父を「誕宏の志」の人として詠じ（其九）、精衛を「猛志」を懷くものとして詠じて（其十）、鮮烈なイメージを讀む人に與えた。しかし、この顧炎武の對句表現は、明らかにその鮮烈なイメージを失っている。この「秋雨」詩の精衛は、洪水を起した大自然という巨大な敵に對し、ただ虚しい闘いを續けるばかりの意氣消沈したイメージである。

さらに、顧炎武は、「客子、何れに行く所ぞ、驂を停めて且く長吟す」と詠じて、差し當って行く目的地を失ってしまった漂泊の旅人として自己を形象化している。長年來、「異州の賢」すなわち全国各地の抗清の同志を求めて旅を續けてきた詩人の挫折の心情が、ありありとそこに讀みとれる。

そして、結びの聯において「何によってわが思いをはらそうか。阮籍が残した詠懷の詩があるではないか。」と、自分の挫折した心を慰めてくれるものとして、阮籍の詠懷詩をもち出している。魏晉の殿しい情況のなかで生き抜いた阮籍に、顧炎武は我が身を重ね合わせて詠じたのであろう。

四

北行の旅に上るまでの顧炎武は、すでにみて来たように、抗清活動に参加する同志の一人として、自己を詩中に形象化することが多い。けれども歳月が経過して、もはや清朝支配が搖ぎのない現實となり、平和が回復してくると、江南の人心は、抗清闘争の持續を主張する顧炎武を受け入れなくなっていた。例えば、全祖望（一七〇五—一七五五）は顧炎武について、「先生は世々江南に籍すると雖も、其の姿稟を顧るに頗る吳會の人に類せず。是を以て郷里の喜ぶ所と爲らずして、先生

も亦た甚しく霜履浮華の習を厭ふ。」(亭林先生神道表)と述べる。そして、顧炎武は、江南の浮華な風俗を嫌い、むしろ北方の質實剛健さに心を引かれていたようである。楊鍾羲(一八六五—一九四〇)が顧炎武の詩文を引用しながら、江南よりも河北の方にこそ、顧炎武の抗清の志に適う風土と人心があったと論述する次の意見は、さきの全祖望の指摘を受け継ぐものであろう。

亭林は世々江南に籍すれども西北に老ゆ。諸詩は皆大河以北にて作るころなり。毎に言へり、「馬伏波(援)、田疇皆塞上より業を立む」と。代北に居せんと欲して嘗て曰く、「使し我が澤中に牛羊千有らば、則ち江南は懷ふに足らず。」(與潘次耕)と。其の阜帽一首に云ふ。

阜帽多常着 阜帽 冬には常に着け

青山老自看 青山 老いて自から看る

鳥隣池樹靜 鳥は池樹の靜かなるを憐み

雲近嶽天寒 雲は嶽天に近くして寒し

淡食隨人給 淡き食は人の給するに隨せ

藜牀任地安 藜の牀は地に任せて安し

閒來過道院 閒來 道院を過るは

不爲訪金丹 金丹を訪ねんが爲ならず

康熙辛酉を以て華陰に卒す。渭川に徘徊して、以て餘年を畢るこ

と、驗ならん。

(雪橋詩話續集卷三)

楊鍾羲の見解は顧炎武の北游以後の詩文から歸納したものであるが、實は顧炎武の北游の志は、すでに江南流轉中に彼の心奥に萌していた。そのことは一六四八年に作られた「將有遠行作、時猶全越」の

顧炎武の詩における孤高の形象

詩中にある「夢に想ふ中原に在りて、河山は崎嶇ならず。朝に瀋陰(洛陽)の宅に馳せ、夕べに穀函(長安)の都に宿するを」という句と、その二年後に成る「秀州」と題する詩中の「將に馬伏波に従つて、邊郡の北に田牧せん」と詠う句によって明らかである。北游して關中に至り、北方から「業(抗清)を立む」ことは、謝國楨氏が指摘するとおりに、抗清のための戦略的見地に立つものであった。しかも當時の顧炎武には、現實問題として、すでに敵側に回っていた崑山の豪族、葉氏の毒手から逃れねばならないという急迫した事情があったのであり、また北方に旅立つ前年(一六五六)には、南京太平門外にて彼は刺客に襲われ、頭部を負傷するという事件も起っていた。かくて中原への出立は、その翌年、顧炎武四十五歳の春に敢行されることになる。

かくして、彼が江南より華北への旅に登った翌年(一六五八)、濟南を過ぎて、まもなく北京に近づく地點で作られた七律「自笑」では、孤獨な旅人としての望郷の念を、屈折した氣持ながら、おかしみをまじえて次のごとく詠う。

自笑今年未得歸 自から笑ふ今年未だ歸るを得ざることを

酒樽詩卷欲何依 酒樽と詩卷は何に依らんと欲する

呼僮向曉牽長轡 僮を呼び曉に向んとして長轡を牽かしめ

覓傭先冬綻故衣 傭を覓め冬に先だちて故衣を綻はしむ

黃耳不來江表信 黃耳は來たさず 江表の信

白頭終念故山薇 白頭終に念ふ 故山の薇

無因化作隨陽雁 化して陽に隨ふの雁と作り

一逐西風笠澤飛 一へに西風を逐ひて笠澤に飛ぶに因無し

この詩の尾聯に、「陽に隨つて南に渡る雁に身を變え、ひたすら秋

の西風を逐つて江南の笠澤に飛びたいが、そのすべもない。」と結ぶごとく、自由に故郷へ飛び歸りたい望郷の情を、「自笑」しながら歌っている。そして、ここでは、自由に空を飛ぶ雁に自分を形象化しているが、先に掲げた「自稱形象詩語編年表」のC群から看取できるように、かかる雁の自己形象が頻繁に表出されてくるのは北游以後の詩においてである。

次の五律「薊州」中の「華鳥」もやはり雁であり、より明確なその例であろう。

北上漁陽道 北のかた漁陽の道を上れば

陰風倍慘悽 陰風倍ます慘悽たり

窮魚浮淀白 窮魚は淀みに浮いて白く

華鳥向林低 華鳥は林に向ひて低し

故壘餘安史 故壘 安史を餘し

居人半鬻奚 居人 鬻奚半ばなり

停驂聊一問 驂を停めて聊か一問す

幾日到遼西 幾日か遼西に到らんと

この詩の第四句に見える「華鳥」には、「戰國策（楚策四）、雁東方より來たる。更羸、虚發を以て之を下し、曰く『此れ華なり』と。註に、華とは身に隱痛あること、華子の如きことを謂ふなりとあり。」と自注する。この自注からすれば、華鳥が詩人自身の象徴であることは言うまでもない。

その後、五年近くの間、顧炎武は華北、山東を旅し、この間二度江南に歸るが、すぐまた北方へ引き返す。そして彼は、康熙元年（一六六二）に至って、ようやく關中への旅、すなわち華北から山西・陝西への旅に出立するが、その年末、初めて華北の「井陘」から山西に入

り、太原附近で汾河を渡った折に、「一雁」と題する五律を作った。この一雁も、顧炎武の旅人としての形象であろう。

一雁度汾河 一雁 汾河を度り

河邊積雪多 河邊 積雪多し

水枯清澗曲 水は枯る 清澗の曲

風落介山阿 風は落つ 介山の阿

塞上愁書信 塞上に書信を愁へ

人間長網羅 人間に網羅を畏る

覆車方有粟 覆車方に粟有り

飲啄意如何 飲啄 意 如何

なお、この詩の末句について、徐嘉の注は、次に擧げる杜甫の「孤雁」の第一句をその出典として指摘する。

孤雁不飲啄 孤雁 飲啄せず

飛鳴聲念羣 飛鳴聲群を念ふ

誰憐一片影 誰か憐まん 一片の影

相失萬重雲 相失す 萬重の雲

望盡似猶見 望盡くるも猶ほ見るに似たり

哀多如更聞 哀多くして更に聞かが如し

野鷗無意緒 野鷗意緒無し

鳴噪亦紛紛 鳴噪するも亦た紛紛たり

確かに顧炎武は杜甫の「孤雁」を意識していたであろう。これに類する表現としては、さきに引用した顧炎武の「自笑」詩の雁が、これも徐嘉が指摘するごとく、やはり杜甫の「歸雁」を出典としている。

ちなみに、清代嘉慶・道光以後の清末の文人たち、張維屏（二七八〇—一八五九）・周濟（二七八一—一八三九）・徐嘉・楊鍾羲等も、顧炎武

の詩が杜甫の詩心を直接繼承するものとして、これを高く評價する。すなわち以下のごとくである。

○亭林先生の詩、沉雄悲壯の作多し。偶記一律〔海上〕之四に云へり。……眞氣は字句の間に噴溢す。蓋し杜の神を得。而して其の貌を襲ふ者の比ぶべき所に非ざるなり。

(張維屏 聽松廬詩話)

○周介存(濟)の晉略は、一生の志事の萃む所と爲る。嘗て言へり。「方今、天下の書を讀むを善くする者、武進の李申者(兆洛)を首とす。書を善くする者は安吳の包慎伯(世臣)を首とす。詩に於いて陶杜を稱へ、然るに謝康樂を痛誣するは亭林の詩を以て少陵の後の一人と爲す。」と。

(楊鍾羲 雪橋詩話卷十)

○(顧亭林)先生、身に沈痛を負ひ、大いに其の親の志を天下に掲げんことを思ふ。奔走流離、時を撫し事に感ずる諸作、實に一代の詩史爲りて、少陵を踵美す。

(徐嘉 顧亭林詩箋凡例)

○亭林の五律、少陵に直接し、其の詩の本を得るは同じなり。

(楊鍾羲 雪橋詩話續集卷一)

從來、杜甫の詩には、放浪の身を鳥、とくに雁に託したものが見られることが指摘されており、顧炎武にあつても、すでに考察したように、雁を自分の放浪の形象として詩中に表出している。この點は、顧炎武が杜甫の詩を明らかに繼承する傳統的手法であると認められる。しかしながら、顧炎武の「一雁」の形象には、杜甫のそれと決定的に相異なる獨自な特徴が存在する。次の章において、そのことを明らかにしたい。

五

顧炎武は「與人書十七」で次のごとく主張している。

君の詩の病は杜有るに在り。君の文の病は韓歐有るに在り。此の蹊徑を胸中に有せば、便ち終身、依傍の二字を脱せず。斷じて峰に登り極に造ること能はず。

この主張は、顧炎武自身の詩作が「惟だみずから己が意を出し、乃ち敢へて知音の者の爲にするを許すのみ。」と強調する「與人書十六」の内容と表裏一體をなすもので、顧炎武の文學思想の要諦とも言える發言である。顧炎武がここに語るがごとく、彼の詩は、ただ杜甫を繼承しただけでなく、杜甫の詩に對する「依傍」を超脱して、意識的に「己が意を出す」ものであった。

前章に引用した「一雁」の詩に立ち戻つて考えれば、この詩の首句にいう「一雁」は、かつて蘇武が匈奴に捕われの身となつたとき、それに書信を託した故事にもとづく表現である。なぜならば、顧炎武は、すでに「千官」の詩において「孰似蘇生北海邊」と詠じ、みずから蘇武に比していることから推せば、北地放浪の途上で、彼の連想が蘇武から雁へ、雁から蘇武の「孤忠」へとつらなつて、我が身を一雁に託したものと考えられるからである。ところで「一雁」の詩の頸聯は、「塞上愁書信、人間長網羅」という。徐嘉はこの上句「塞上愁書信」に對し、『漢書』蘇武傳を典故としてあげている。この指摘は正しい。ただ下の對句「人間長網羅」については、徐嘉は『禽經』の「雁銜蘆以避網」を引いているが、これは注として妥當でなく、『禽經』よりも、むしろこの出典は、嵇康の五言詩「答二郭三首」中に見える「常に網羅に嬰るを恐る」をあげるべきであらう。顧炎武は、

この詩において、魏晉交替期の嵇康と同じように、自己をとりまく恐怖と不安の翳りを象徴しているとみたい。高く飛翔しつつも常に網羅に畏れおののく顧炎武の意識が、この「一雁」に形象化されたと言え

る。
要するに、「塞上愁書信」の句から引き出すことができる「蘇武の孤忠」は、飛翔する雁に託されており、その飛翔する雁とこれを阻害せんとする網羅とを共存させた詩的形象こそ、顧炎武のこの詩の特徴と言える。云い換えるならば、詩人の分身とも言うべき雁が、網羅にかかることなく高く飛び續けるところ（遺民の生涯を遂げ孤忠であること）に、顧炎武の孤高の意識が初めて表現されて來るのである。ところが、杜甫の飛鳥に關する詩篇には、かかる孤高の意識の形象化がほとんど見當らない。

顧炎武の補網に關する詩語や鳥の飛翔についていえば、明清鼎革という苛烈な過渡期に、當時の世情にあらがう人間としての自律性を保たんとした彼が、おなじような過渡期に生きた魏晉の嵇康・阮籍の詩を繼承したことに、それはそれなりの必然性があったのである。まず顧炎武が嵇康に共感を示した詩としては、「延陵は寶劍虚しく、中散は絲桐を絶つ」（關中雜詩之四）と「邈なり矣越石の嘯、悲しき哉嵇生の琴」（華下有懷顧推官）との二例を見ることが出来る。しかしながら、顧炎武の詩は、私の見るかぎり、嵇康よりも阮籍の「詠懷詩」からの影響が強いように思われる。さきに引用した「秋雨」の詩に「何を以て吾が懷ひを解かん、嗣宗に遺音有り」と詠い、また「十載江村二子偕にあり、相逢へば毎に詠ず歩兵の懷ひ」（常熟歸生晟陳生芳續書來以詩答之）と詠うのをみれば、顧炎武の阮籍「詠懷詩」への強い傾倒を讀みとることができるし、彼の死の五年前の作品

「薊門送子德歸關中」に自注して「詠懷其十六」を引用していることを見れば、そうした阮籍への傾倒は、顧炎武の晩年までも持續していたと考えられる。そして事實、顧炎武自身がふりかかる網羅をかいぐりながら天壽を全うした生き方は、正に阮籍のそれに酷似している。

さて、顧炎武の放浪の象徴であり、また彼の孤忠の形象でもある雁は、彼が晩年となるにつれて、より高く飛翔する翡翠・鸞鳳・黃鶴等のイメージにと増幅されていく例を見出すことができる。

翡翠年深伴侶稀 翡翠年深くして伴侶稀なり

清霜憔悴減毛衣 清霜に憔悴し毛衣を減す

卓哉鸞鳳姿 卓なる哉 鸞鳳の姿

飄飄高自引 飄飄として高く自から引く

原注：賈誼弔屈原賦「鳳漂漂其高逝兮、夫固自引而遠去。」

原注：靈石縣東北三十五里神林晉介之推祠

黃鶴山川意 黃鶴 山川の意あり

相隨萬里翔 相隨つて萬里を翔けん

誰能三十載 誰か能く三十載

龜殼但支牀 龜殼のごとく但だ牀を支ふるのみならんや

原注：史記龜策傳「南方老人用龜支牀足、行二十餘歲、老人死、移牀、龜尚生不死。龜能行氣導引。」

（過朝邑王虛士建常）

ここに列舉した三例のうち、とりわけ最後の詩に見える「黃鶴」は、これもやはり、阮籍をはじめ魏晉の文人たちの詩中にしばしば現われる黃鶴の飛翔を意識したものであり、「鸞鳳」と同じく高く飛翔

する鳥であつて、孤忠から孤高への象徴的表現となっている。そして、この黄鶴の飛翔のエネルギーの源泉となっているものは、詩中に詠うところの鬱屈した「龜」のごとく、一途に遺民であらんとして、またひとり經世致用の學問を續ける當時の顧炎武の孤高の精神である。

この「黄鶴」と「龜殻」を對照的に詠った五言絶句一首は、第一章ですでに引用した「關中雜詩」五連作と同年の作であり、さらにいえば、一六七八年の博學鴻儒科の推薦を、彼が死を賭して免れた直後の作品であつた。「關中雜詩」に至つて、彼は「孤高」を詩語として初めて用い、「孤高にして歲華を闕す」と詠つたが、この孤高の形象である「黄鶴」が、眞に顧炎武自身の生き方にならうのも、一に彼が苦節の遺民の生涯を貫徹していたからにはかならないのである。

さて、顧炎武が、その長い放浪の人生を切り上げて陝西華陰に永住しようとしたころ、警隱詩社（16）以來の友人で江南吳江に住む載耘野に宛てた書翰中に、彼は「關中詩五首、寄次耕詩一首を呈覽す。以て出處の大概を徴すべし。」と述べる。ここにいう「關中詩五首」とは、言うまでもなく前述の五連作「關中雜詩」のことであり、その第五首に、彼の詩中における唯一の「孤高」の用例を見た。また「寄次耕詩一首」は、内容から推して「寄次耕時被薦在燕中」詩であると判断される。

それで最後に、この「關中雜詩」の第一首と「寄次耕時被薦在燕中」詩を取り上げて、顧炎武の孤高の意識が、その晩年にますます高揚してゆく過程を尋ねてみたい。

まず「關中雜詩」の第一首は、次のごとく詠う。

文史生涯拙 文史 生涯拙なく

顧炎武の詩における孤高の形象

關河歲月勞	關河に歲月勞す
幽情便水竹	幽情 水竹を便とし
逸韻老蓬蒿	逸韻 蓬蒿に老ゆ
獨雁飛常迅	獨雁飛ぶこと常に迅やかに
寒雞宿愈高	寒雞宿すること愈いよ高し
一闋西華頂	一たび西華の頂を闕えは
天下小秋毫	天下は秋毫よりも小なり

この詩、第四句の「逸韻老蓬蒿」について、徐嘉は、「嘯旨」に、阮氏逸韻は阮籍の作る所なり。音韻放逸、故に逸韻と曰ふ、とあり。杜甫の『秋雨の歎』に、老夫出でざれば蓬蒿長ず、と云ふ。」と注している。この指摘は、すでに徐氏が顧炎武の詩中に窺える阮籍と杜甫との強い影響の痕跡に氣付いていたからのことであろうか。それはともかく、それ以上に、この詩に映像化された「獨雁」と「寒雞」の姿は、顧炎武の殿しい孤高意識を暗示するすぐれた表現であると思われる。ついで「寄次耕時被薦在燕中」詩を見るに、この詩は十七韻にも及ぶ長篇の五言古詩であるが、その終末部分にいう。

嗟我性難馴	嗟 我 性は馴れ難く
窮老彌剛峻	窮老して彌いよ剛峻なり
孤跡似鴻冥	孤跡は鴻冥に似るも
心尙防弋矰	心は尙ほ弋矰を防ぐ
或有金馬客	或るとき金馬の客有りて
問余可共登	余に問ふ「共に登るべきか」と
爲言顧彥先	爲に言ふ「顧彥先は
惟辨刀與繩	惟だ刀と繩とを辨ずるのみ」と

この詩は、さきの「關中雜詩」が作られた翌年、一六七九年の作で

ある。當時、清朝は明史編纂のために再び顧炎武を史局に招請したが、顧炎武はこの招請に對して、「七十の老翁何の求むる所ぞ、正に一死を缺く。若し必ず相逼らば、則ち身を以て之に殉ぜん。」（與葉詒菴書）と拒絶し、みずからの孤忠を守らんとした。その時の心中を詠ったのが、この「寄次耕詩」一首である。なかななく、「孤跡は鴻冥に似るも、心は尙ほ弋矰を防ぐ」の二句は、今なお網羅を意識しながらも、敢えて孤忠を貫いた、顧炎武の孤高の意識が明確に形象化されている。

かくして顧炎武が最晩年に草した「與載耘野」という書翰に、「弟生、多難に罹りて、異邦に淪落し、長しく野に率ふの人と爲りて、復た首丘の日無し。然れども、九州は其の七を歴、五嶽は其の四に登る。今將に大華に卜居し、以て餘齡を卒はらんとす。百家の説、粗ぼ古文を闢ふ有り。一卷の文、後代に裨すること有らんと思ふ。此れ則ち區區として自ら矢ひ、敢へて惰偷せざる者なり。關中詩五首・寄次耕詩一首を呈覽す、以て出處の大概を徴すべし。」という。遙かに離れた郷里江南の友に感慨深く語りかける顧炎武の文面を味讀すれば、「死に至るまで胆勉して」遺民の生涯を貫き、なおかつ經世致用の學を後世に残さんとして耐忍した、彼の孤高の重さが、ひしひしと吾人の胸に迫るはずである。

註(1) 中華書局上海編輯所編輯『歸莊集』卷三。一七〇頁。

(2) 錢穆著『國史大綱』（臺灣商務印書館 一九六七年二版）下冊第八編。論者未見。黃秀政著『顧炎武與清初經世學風』の引用（四六頁）に據る。

(3) 黃秀政著『顧炎武與清初經世學風』（臺灣商務印書館 一九七八）二八頁。

(4) 章炳麟「書顧亭林軼事」（華國月刊第一卷第六期）。

(5) 『中國文學論集』（第八號 一九七九）所載。本稿は、この書稿を取り入れて成った。

(6) 岡崎文夫「北游以前の顧炎武」（文化一一二 一九四九）。

(7) 『顧亭林詩文集』（中華書局 一九五九）に據る。

(8) 「哭顧推官」、この詩は「推官吾父行 世遠亡譜系 乃乎上那選 始結同盟契……」で始まる。

(9) 林田愼之助著『中國中世文學評論史』（創文社 一九七九）一六七頁。

(10) 入矢義高著『明代詩文』（筑摩書房 一九七八）一七頁。これは元末明初の劉基と楊基の詠懷詩についての指摘である。

(11) 『王船山詩文集』（中華書局香港分局 一九七四）上冊一九六頁。晝齋自定稿。

(12) 謝國楨著『顧寧人學譜』（臺灣商務印書館 一九六三）一四五頁。

(13) 徐嘉は杜甫の「歸雁」詩の末句「愁寂故山薇」を引く。この「歸雁」詩は、「萬里衡陽雁 今年又北歸」で始まる。

(14) 幸田露伴は「幽情記」の中で、「自ら視て孤忠未死の人となし、他は目して寥天隻影の鶴となせる亭林顧炎武」と述べている。

(15) 一六七五年の作「薊門送子德歸中」の「彈箏叩缶坐太息、豈可日月無弦望」に、顧炎武は自注して「望字作平聲、用阮籍詩『是時鶉火中、日月正相望』と引く。また、『日知錄』卷二七の「文選注」もその好例。

(16) 謝國楨「顧炎武與驚隱詩社」（『中華文史論叢』第八輯所載）参照。

(17) この年一六七九年に、葉方藹勅菴は明史館總裁となる（國朝先正事略）。清水茂氏は、「推薦したのは、葉方藹であって、かつて顧炎武を陸恩殺害事件によって陥れようとした葉方恒の弟である。そこには、はっきり踏み繪の意圖がうかがえるのではなからうか。」（『顧炎武集』朝日新聞社 一九七四）と述べる。

(18) この一聯に徐嘉は、「後漢書逸民傳論（楊雄法言曰）：鴻飛冥冥、弋者何筭焉。雷淵詩：弋矰何苦慕冥鴻。」を引いて注す。